

# ドストエフスキー『作家の日記』は どのように読まれて来たか

長縄光男

## はじめに

この数年来、「ドストエフスキーとゲルツェン」という総合的なタイトルの下で二度ほど報告をしてきたが<sup>1</sup>、本稿はその第三弾ということで、『作家の日記』を取り上げる。というのは、ここではドストエフスキーが小説類におけるのとは異なり、様々なトピックスを取り上げ、それぞれについてかなり自由率直な物言いをしており、その意味で、彼の思想が比較的明確にうかがえるから、ということにある。つまり、小説類の中ではドストエフスキーは様々な人物を登場させ、プロットの展開過程で彼らに様々のことを語らせるという、バフチンの言う「ポリフォニック」な手法を用いているために、読者は時としてそのすべて者たちの発言の中に作者その人の本音的な思想を読み取ることになるという、極めて難解な、と言うべきか、極めて狡猾な、と言うべきか、そういう複雑な構造の前で戸惑うことになるのだが、『日記』はそうした複雑な構造にはなっていないので、読者はそこに作者の本音ともいうべき思想を比較的容易に捕捉することが出来るために、本来のテーマである「ドストエフスキーとゲルツェン」という課題への切り口としては有効なのではないかと考える所以である。

## 1. 雲泥の落差

しかし、そこにはひどく当惑させられることがある。

この「当惑」の正体を結論的に、そして、あからさまに言ってしまえば、『日記』が総じて極めて「反動的」なものだということにある。勿論、「反動的」という評価自体、読み手の一つの立場を反映しているだけのことだから、この形容詞は何重にもカッコを付けて使わねばならないということは言うまでもないが、ただ、少なくとも『日記』では、小説類に見られるような、多様な解釈を可能とすることによって読者を広い知的世界に導き出すという、普遍性を持った柔軟な思索とは異なる、狭隘で偏頗な主張が少なからず語られているということには、大方の同意が得られることだろう。そして、その主張の多くは、少なくともこれを字義通りに読む限り、時の政治的諸関係の中では、どう客観的に見ても、「保守」の範疇をかなりの程度超え出ていると言っても、大きな間違いではないだろう。先に私が「反動的」といったのは、このような判断を踏まえてのことであり、かくして、

---

<sup>1</sup> 長縄光男「ゲルツェンとドストエフスキー——予備的考察」『ロシア思想史研究』第9号、2018年33-50ページ。；同「ドストエフスキーとゲルツェン——問題の所在」『現代思想』掲載予定。

読者は小説類に見られる宏量な普遍性と『日記』の偏頗な狭量さとの懸隔に戸惑い、「当惑」することになるのである。

私がここで「偏頗な狭量さ」と言った時に念頭に置いているのは、主として露土戦争（1877-1878年）前後の政治情勢に触発されて書かれた一連の戦争談義のことだが、その露骨なまでに排外主義的で好戦的な主張には辟易とさせられる。今日の報告のこれからの議論の前提として、まずは彼の言うところをごく限られた語数で私なりに要約して置こうと思うが、それはこんな風に言うことが出来るだろう。

——バルカン半島に住むスラヴの同宗者に対して暴虐の限りを尽くすオスマン帝国を、この戦争によって黒海周辺から駆逐し、もってコンスタンチノーブルをロシアが領有し、ここを拠点にロシアを中心とした正教を奉ずる国々からなる一大勢力を結集し、カトリックとプロテスタントの西欧と対峙し、正しいキリスト教に基づく新しい世界秩序を築き上げよう——

そして、いざ戦争がロシアにとって屈辱的な結果に終わってみると、今度は「西で味わった屈辱を東で癒す」というロシア外交の定石のお先棒を担ぐように、ロシアのアジアへの植民的進出を「アジアにおける文明普及者としての我々の使命」（27：37）と称して正当化し、そこをロシア人の新天地としようと言う。そのイメージをドストエフスキーはこんな風書いている。

そこに新しいロシアが生まれ、それが古いロシアを復活させ、やがては甦生させ、その行くべき道を明らかにしてくれることだろう。……アジアは我々の目指す場所だ、そこには我々の富がある。そこに我々は大洋を持つのだ。

——広々とした野原や森——

子供たちはそれぞれの父親の膝下で、果樹園や耕地に囲まれて、清々しい大空を仰いで大きくなるのだ。そうだ、そこには我々がまだ完全に想像もできないような多くの期待、大きな可能性が秘められているのだ！（27：38）<sup>2</sup>

ところで、私たちはすでに『カラマーゾフ兄弟』の中で、アリョーシャが長老ゾシマの遺骸に別れを告げて僧院を出た時、満天の星空を仰ぎ見て、その美しさに感極まり、大地にひれ伏す場面を読んでいる（第7編 アリョーシャ）。その場면을ドストエフスキーはこんな風書いた。

何のために大地を抱きしめたのか、彼には分からなかった。大地に、その至る所に、ど

---

<sup>2</sup> ドストエフスキー30巻全集の巻数とページ数を示す、以下同じ。Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений в тридцати томах / АН СССР, Институт русской литературы (Пушкинский дом); [редкол.: В.Г. Базанов (гл. ред.), Г. М. Фридендер (зам. гл. ред.), В. В. Виноградов и др.] — Наука. Ленинградское отделение, 1972–1990.

うしてこんなにも激しく口づけしたくなったのか、その答えが自分にも分からなかった。しかし、泣きながら、咽びながら、大地を涙で潤しながら、彼は大地に口づけし続けた。そして自分は大地を愛する、永遠に愛し続けると夢中になって誓うのであった。(14:328)

そして、著者はアリョーシャが涙をぬぐって大地から立ち上がった時、ひ弱な青年が雄々しい戦士に変身していたことを告げるのだが、私はドストエフスキー文学の一つの到達点ともいべきこの個所を、ドストエフスキーが描いた情景の中でも、最も劇的で最も美しい情景と考えるものである。それに引き換え、先に引用した『日記』の文章については、私はこれをドストエフスキーが書いた文章の中でも、最も卑俗な文章だと考える。ここには文字通り「雲泥の落差」がある。ドストエフスキーがこんな文章を書き始めたところで亡くなり、これ以上に低劣な床屋談義に付き合わなくて済むようになったのは、私たちにとって不幸中の幸いというべきだとすら思えるほどである。

こうした「落差」感は決して私だけのものではないだろう。このことを主だった論者に従って確かめてみようというのが、本小文の主たる趣旨である。

## 2. 世紀初頭から戦間期

勿論、アリョーシャを涙の裡に変容させるドストエフスキーとアジアへの進出を呼号するドストエフスキーとの間にいかなる不自然さも感じない人々にとっては、この間にいかなる問題も存在しないだろう。例えば、世紀初頭のロシアで「宗教的ルネサンス」と呼ばれる正教意識の復活期に、ドストエフスキーは従来のような「左翼」からする批判的読まれ方とは異なり、肯定的な評価を獲得して行くのだが、そうした時代に主としてドストエフスキーの新たな読み手として登場した人々——例えば、ベルジャーエフ、ローザノフ、シェストフ、メレシコフスキー、ブルガーコフのような人々——にとって、上に見たような「落差」は問題にはならなかったようだ。彼らの関心の中心にあったのは、主として、「肥大化した個我の意識」という「西欧近代の毒」を食らい、神を見失った人々の陥る罪業を「正教徒の立場から断罪するドストエフスキー」というコンセプトであり、そこで重要なのはあくまでも「正教徒ドストエフスキー」なのであり、そのことにこそドストエフスキーへの彼らの共感の源があったのだから、「正教擁護」の立場からする「露土戦争論」は抵抗なく受け入れられたことだろう。彼らの著作で「戦争論」が取り立てて議論の対象となることのないのはそのためだと思われる。「何も書かない」というのも、読み方の一つの形なのである。

しかし、「肥大化した個我の意識」という「西欧近代の毒」を食らった当事者たる西欧の知識人にとって、事はそれほど単純ではなかったはずだ。世紀末から世紀の初頭、世界戦争の危機を前にして、西欧そのものの「没落」が声高に語られるようになりつつあった時代に、ドストエフスキーの「見立て」は深刻な指摘として受け止めざるを得なかっただろう。しかし、正教徒ならぬ大方の彼らにとって、「正教徒ドストエフスキー」の処方箋は受け入れることはできなかったことだろう。彼らがドストエフスキーの「戦争論」に当惑するのは、そうした事情に由来する。その最も早い、そして最も端的な事例がジイドである。

アンドレ・ジイドはこれまでトルストイという大きな山の陰に隠れて霞んでいたドストエフスキーという作家の存在に、西欧で最初に気づいた人であったと言ってよいと思うが、彼は当時西欧で読まれ始めていたニーチェと同質の問題意識を、「後進国」ロシアの作家ドストエフスキーがすでに抱いていたことを知って驚いたのである。そのことを語っているのが1908年に書かれた「書簡集によって見たドストエフスキー」だが、そのような関心からドストエフスキーに接近して行った彼にとって、露土戦争とその前後の政治状況へのドストエフスキーの発言は理解しがたいものであった。彼は1921年、作家の生誕百年を記念して行われた講演の中で、『日記』における戦争談義について、概略次のように言っている。

この書物は人を欺くこと甚だしい書物である。我々はそこに社会理論の提示を見るが、いずれも曖昧模糊として、拙劣に表現されている。ドストエフスキーによるヨーロッパの将来への見通しは間違っただけで、しかし、ここで取り上げられているのは彼にとって興味ある課題ではない。政治上の問題は彼にとっては社会問題よりも重要ではないと見え、社会問題は道徳的かつ個人的問題よりも重要でないものに見えた。我々が彼に期待するもっと深遠な、もっと稀有な真理は、心理の領域に属するものである。要するに、ドストエフスキーは本来の言い方では、思想家とは言えない。彼は小説家なのである。(ジイド、130-133)

ここで明らかなことは、ジイドが作家ドストエフスキーと政論家ドストエフスキーとを截然と区別し、『日記』におけるドストエフスキーの政治談議をまともには受け止めていないということである。実は、こうした読み方をしているのはジイドばかりではなく、後に続く西欧の論者の概ね全てに共通する読み方でもあるのだが、ここでは、さらにジイドと同時代の評論家マリの言うところも聞いてみよう。

ジョン・ミドルトン・マリの『ドストエフスキー』(1916年)は数あるドストエフスキー論の中でも最も優れた評論の一つだと私は考えているが、この中でマリは「19世紀ロシア文学における創造的文学と批評との間の激しい対比」に驚きつつ、その顕著な事例として『日記』を取り上げ、こう書いている。

もし、諸君がドストエフスキーの小説を読み、また、彼の晩年の安定した時代に書かれた規則的な時評である『作家の日記』を読むならば、諸君はおそらく両者の間の奇異な矛盾に心打たれるであろう。単なる心理的精緻など到底及び難い小説を書いた作家が、その『カラマーゾフ兄弟』の構想中に、幼稚な倫理と空疎な政治論交じりの批評を書いている光景がここにはあるのだ。(マリ、257)

マリはドストエフスキーの作品群について、今日なお傾聴するに値する細緻で鋭利な論評を数々展開しているにもかかわらず、『日記』についてはこの程度の論及で済ませているのである。言うなれば、「一蹴」しているわけだ。

そもそも、彼のドストエフスキー論の中で特に印象的なのは、『罪と罰』論の中心にラスコーリニコフではなくスヴィドリガイロフを据えていることだが、これは彼がスヴィド

リガイロフこそ「近代の毒」に最も深く冒された人物と考えているからである。そして、彼がスタヴローギンにドストエフスキー自身の「真の姿」を認めているのは、彼が当の作家を「近代の毒」に深く冒された人であったと認識していること示している。ドストエフスキーをこのように理解する目から見れば、「近代の毒」の解毒剤として作家が提示する「正教」という処方箋など、いかにも嘘々しく見えたことだろう。マリに言わせれば、敬虔な正教徒にして熱烈な愛国者シャートフなど、所詮作家の「表の顔」に過ぎなかったのである。マリにとって、ドストエフスキーの戦争論が取るに足りないものと見えたのは当然の成り行きである。

\* \* \*

戦間期に書かれたドストエフスキー論ということでは、カーの『ドストエフスキー—新しい評伝』(1931年)も逸することはできない。

エドワード・ハレット・カーには外交官、国際関係学者、歴史家、評伝作家といった様々な顔があり、それぞれの領域において今なお読むに値する著作を多数残していることは周知のとおりだが、彼の『ドストエフスキー』はそうした多くの著作の一つにすぎない。そもそも、評伝作家という顔自体、彼にとって本来の顔とは言い難いものがあるが、彼のドストエフスキー論が世に問われた1931年という年が、ドストエフスキーの没後50年に当たっているということからも推測されるように、これは外的な動機に基づいて書かれたといった感が強く、従って、この本はドストエフスキー論にともすれば見られがちな過度な思い入れとは無縁で、総じて、冷ややかでアイロニカルな描き方が印象的である。エピローグの中で著者がこう書いているのはこうした印象を裏付けるものだろう。

およそ作家の50年忌には、たいていその名声は失墜の極に達するものである。ドストエフスキーの場合もその原則にかなっている。というのは、彼の影響は最早その役割を終えてしまったというのが、ロシアでも西欧でもこの数年間の流行となっている。(カー、307)

戦後における「実存主義」の流行の中で、ドストエフスキーの文学が「不条理文学」の先駆けとしてもはやされたことを思うと、カーのこの観察は見事に外れたということになるが、しかし、そもそも、西欧近代合理主義のど真ん中で生まれ育った超エリートたる彼から見れば、ドストエフスキー文学の「不条理性」はロシアという国の後進性の証しに他ならない。彼によればロシアは「合理化の因襲に拘束されない国」であり、従って、「ドストエフスキーの世界は、我々の住む世界よりももっと原始的で、もっと根源的な世界である。……それはむしろ中世期やルネサンス時代に境を接しているようである。それは人間が統御することもできず理解することもできない蒙昧な諸々の力に満ちた森の中の小さな開拓地である。」(カー、303)

このように醒めた目で見ながら、ドストエフスキーについて当時としては大著ともいうべき伝記をものしたというのは、カーの関心の広さ、才能の大きさの証しではあるが、しかし、その大才の目から見ても、作家としてのドストエフスキーはシェークスピアに比肩

しうるほどの大きな存在であったからでもあった。その芸術性をカーがどこに認めているかを語ることはここでの課題ではないが、しかし、ドストエフスキーに高い芸術性を認めるが故にこそ、彼には『日記』など「今日ではほとんど存在価値を持たない」代物であり（カー、262）、その戦争論に至っては全くもって信じがたい議論に見えたのである。カーはドストエフスキーの「戦争談義」について、「これほど偉大な芸術家が主戦論的ジャーナリズムにそのペンを奉仕させたというのは、後世から見れば傷ましくも信じがたいことである」とだけ書いている。（カー、261）

### 3. 戦後

カーの皮肉な見方にも拘わらず、ドストエフスキーが大戦を乗り越えて、今なお無事に生きているというのは、誠に慶賀すべきことであるが、以下では、戦後の主だった評者によって『日記』、とりわけその好戦的部分がどのように語られているかに、更に続けて耳を傾けよう。

コンスタンチン・モチュリスキーのドストエフスキー伝が書かれたのは戦後間もない1947年のことだが、これは最もスタンダードな評伝として夙に高名であったにもかかわらず、邦訳されて刊行されたのがやっと2000年のことであったというのは、わが国におけるドストエフスキー熱の高さを思えば、信じがたいほどだ。

モチュリスキーのドストエフスキー伝を総体として論評するのはここでの課題ではないが、ただ、本稿の課題との関りで言えば、周到な目配りの効いた浩瀚な、そして最も優れた評伝の中にあってもなお、ドストエフスキーの露土戦争論はさほど大きな位置を占めていないということは、紛れもない事実である。つまるところ、ドストエフスキーの露土戦争論は、マリにみられたような「一蹴」といったそっけない扱いではないとはいえ、モチュリスキーにとっても多くのページを割くに値しない論題であったということは確かなようだ。以下、この問題に関する触りの部分を引用する。

「近東問題」はドストエフスキーを偉大な達成の予感で刺激してやまない。ロシアは自らの歩むべき真の歴史的道へと踏み出し、兄弟スラヴ諸国の庇護者、正教信仰の指導者になるに違いないと確信している。けれども、ドストエフスキーはその思想の悲劇的弁証法のために、宗教的奉仕の問題から国家の力の問題へとはずれ、ロシア救世主義は軍事的帝国主義へと変化している。本末転倒である。（モチュリスキー、617）

ここにいう「悲劇的弁証法」とは、「無限の自由から出発しながら、無限の専制に到達してしまった」というシガリョフ（『悪霊』）の「悲劇的矛盾」が念頭に置かれている。モチュリスキーはドストエフスキーもシガリョフと同じ「悲劇的矛盾」に陥っているというのである。彼はさらに書いている。

これと同じ悲劇的矛盾が、ドストエフスキーのキリスト教的帝国主義にも見られる。彼は「世界の僕」のイデーから出発しながら、戦争擁護に終わっている。ロシアの宗教的使命がコンスタンチノーブル獲得を要求している。けれども、ドストエフスキーの予感が当たらなかった。主がロシアに用意したのは、代々のビザンツ皇帝の古都における戴

冠式ではなく、十字架の道と受難者の荊冠であった。(モチュリスキー、618)

次いで、1952年に書かれたゼンタ・マウリーナの『ドストエフスキー』を取り上げよう。私はマリのドストエフスキー論と並んで、彼女のドストエフスキー論を極めて高く評価するものだが、この本の中でも『日記』については小さな扱いで、「矛盾」という小題の下でこう書かれているにとどまる。

ドストエフスキーの作品、とくに『日記』には、キリストを唯一の導きの星とした彼が絶対君主政体を承認していたということから生じた若干の食い違いもまた当然表れている。彼の宗教観、彼のキリスト観は新しいが、その政治観の中では、彼は今日の我々には反動的にみえるのである。……今日では、彼が最大の真理、最高の愛を嘘や暴力行為と結びつけようとしているかのような印象をうける。とにかく、彼の考えの中で、宗教改革の可能性を絶対主義国家と結びつけたのだ。絶対君主制は地上に神の国を実現させると彼は信じている。(マウリーナ、198)

どんな暴力行為に対しても神秘的な恐怖を感じていた彼が、対トルコ戦争を万歳を持って迎えた。この戦争をキリストのために遂行されねばならない十字軍と考えたのだ。(マウリーナ、198-199)

今日の視点から見れば、彼の政治思想はその宗教思想とはどうしても一致しないことは明らかである。……彼はロシアのドン・キホーテを描いたが、政治観では彼自身がドン・キホーテであった。(マウリーナ、199, 200)

次いで、アンリ・トロワイアはそのドストエフスキー伝(1960年)の中で、露土戦争においてドストエフスキーはその祖国愛が嵩じて、遂には、流血は神聖だという結論にまで達してしまっただとして、次のように書いている。批判の論鋒には、これまでの論者以上の鋭さがある。

事実、彼は中東への軍隊の派遣という問題をロシア国民のメシア論という自説の裏付けとみなしている。ロシア国民が戦おうとしているのは、神聖なる神の敵なのだ。……だが、いったい無分別で残忍極まりないこの殺戮を一体どう弁明するのか。ドストエフスキーはその点に目を向けていないようだ<sup>3</sup>。キリスト教を盾としたこの残虐行為は、どう見ても眉唾物の詭弁でしかない。キリストは我々を救うために自らの血を流した。それなのに彼は他人に血を流させておいて、キリストを救おうというのだろうか。(トロワイア、630)

ここで彼が見落としているのは、ロシア人のキリストの到来を表明しようとするあまり、本来のキリスト教教義から逸脱し、他のキリスト教徒たちを罪に陥れようとしていると

---

<sup>3</sup> ちなみに、ゲルツェンが問うのはまさにこのことである。

いうことだ。(トロワイア、632)

ドストエフスキーの論評は政治と宗教が根深く絡み合い、切っても切れない関係となっている。彼の勢いこんだ熱っぽい意気込みがその両面を切り離して考えさせまいとする。こうしてヨーロッパの問題を俎上に載せるためにはせ参じたかと思うと、今度はとんぼ返りしてバビロンに舞い戻り、そして、科学、民主主義、平和論とせかせかとあちこちと駆け回る。そこで、雄弁な彼の文章は、つい勢い余って、筆が滑り、思っている以上のことまで口走ってしまう。(トロワイア、633)

私は、西欧の論者たちによる「ドストエフスキーの戦争論」の批判としては、トロワイアのこの論に最も深く共感するものである。

\* \* \*

さて、ここまで図らずも西欧の論者ばかりを取り上げてきたが、最後にロシア（ソヴィエト）の論者、グロスマンによる「戦争論」についての評価を紹介して、この節を終える。

レオニード・グロスマンの『ドストエフスキー』は「偉人伝叢書」の一巻として1963年に刊行された。つまり、フルシチョフ治下の「雪解け」時代の産物である。この本では伝記的諸事実は勿論のこと、作品の分析においても創作ノートにまで遡ってその制作過程が考察されているなど、これまでのソヴィエトにおけるドストエフスキー研究の成果が十分に取り込まれており、今日でも依拠するに足る優れた著作だが、本稿が主として関心を向けている「戦争談義」については、西欧の諸家と同じような見解が同じような分量で述べられているにとどまる。以下にその部分を引用する。

この受難の作家が嘗めてきた様々な試練に対して報われた未曾有の勝利の時期にも、影の側面があった。最後まで止むことを知らなかった創作の成長も作家の政治思想の面ではそれに相応する成果を産まず、政治思想は暗いものになり、ますます戦闘的な反動へと傾斜して行くばかりであった。これが時折『作家の日記』の著者の晩年の生活を喜びのない陰気な色調でいろどり、その色調が彼のヒューマニズムの宣伝にも限界を与え、彼が最後まで守り通そうとした美の崇拜さえも低めてしまった。(グロスマン、354)

同じロシア人でも「ロシア・ルネッサンス」期の正教徒の論者なら、決してこのようには書かなかったことだろう。

以上、西欧とロシアの諸家の「戦争論」を紹介してきたが、そのいずれにも共通するのは、その論ずるところの関心が、「反動的」とも理解されうるような露骨で奇態な戦争論からドストエフスキーの作家、芸術家としての偉大さを如何に救うか、彼をいかに傷つけずに済ませるか、とすることにあったが、私の問題関心は、どうしてこの両者を分けて考えなくてはならないのか、ということにある。「戦争論」の「反動性」と高い「芸術性」とはどう結びついているのか、それを私は聞きたいと思っているのである。

では、この問題は日本でいかに論じられているか。それを以下に見よう。

#### 4. 日本

この項では河上徹太郎と渡辺京二の論を取り上げたいと思う。それというのも、両者の議論では、西欧におけるそれとは異なり、ドストエフスキーの「戦争論」が一方では奇妙な論法で容認され、他方では本稿的な問題の設定自体が否定されているからである。

河上徹太郎による『作家の日記』に関わる論考は昭和48年(1973年)4月から同年10月まで雑誌『文学界』に7回にわたり連載されたもので、それぞれの表題は「ドストエフスキー対西欧」、「露土戦争とプーシキン」、「西欧派とスラヴ派」、「ドストエフスキーの主戦論とトルストイの平和論」、「短編『百姓マレイ』」、「『おとなしい女』の自殺」、「ユダヤとビザンチン」とあることから推測されるように、これは系統だった『日記』論ではなく、「『日記』に現れたドストエフスキーの晩年の素顔を思いつくまに印象付けられた個所を列挙した」(河上180)エッセー風の読み物だが、しかし、『日記』を様々な角度から論じたものとしては貴重である。

こと「戦争論」に限って言えば、その特徴は①ドストエフスキーにとって露土戦争が「文学的事件」であったということ強調し、②従って、ドストエフスキーが「戦争」を専ら「文学的問題」として論じていると見做し、③「戦争論」を『カラマゾフ兄弟』や「プーシキン講演」と直接結びつけようとしている、というところにあるが、「戦争論」を文学から引き離すことに腐心してきた欧米や現代ロシアの多くの評者と一番大きく異なる点は、まさにここにある。

しかし、河上がしきりに「文学」という語にこだわっているのは、私には彼が自分(たち)の戦時中のパフォーマンスが果たした「政治的」意味を弁明し、希釈しようとしているからのように思われ、何となく不愉快な気分させられるのだが、そのような感想があながち的外れでないことは、次のいくつかの引用によって明らかだろう。

(コンスタンチノーブル領有についての)これらの声明は、なんだか「大東亜共栄圏」時代に使われた言葉を思い出して尻こそばゆい思いがする。しかし、この衣の下に侵略主義の鎧がちらつく声明も、ドストエフスキーにとっては政治的なカムフラージュではなく、彼の文学的な本音なのである。この信念に、ゾシマ長老の思想も、それから最後の傑作『プーシキン講演』の要旨も直結している。この放談めいた政治論に正しく彼の作家としての思想の円熟があるのだ。(河上、150、傍点は引用者、以下同じ)

コンスタンチノーブル占有論は「便乗加担」と思われそうだが、そうした政治的思惑には関心はない。これは彼の文学的事件なのだ。露土戦争開戦当時の心境の周辺を探ってみれば、若いころのミルやシラーの平和と人道の徒であった彼が、こんな民族戦争肯定論に傾いて行くのも、かつての我々の仲間だって開戦当時全然心当たりがなくはないはずだ。(河上、152)

また、1877年4月、開戦の時の『日記』の戦意高揚的文章を、河上は敢えて「戦犯」的

と呼びつつ、こう続けている。

私はこれらの気負い立った主戦論を釈明もしなければ糾弾もしない。それは読者の方に用意があるだろうからお任せしておく。とにかくこのドストエフスキーの「ロシアの斯拉ヴの使命」の信念が三年後の（ドストエフスキーの全文学理論の頂点をなす）『プーシキン講演』に発展していったことは確かなのである。その間に『カラマーゾフ兄弟』が書かれ、彼の信念を固めたことも大切である。（河上、154）

しかし、「戦争論」が『兄弟』や『講演』とどう結びついているのかという、最も肝心のことは、一向に語られてはいない。

少々意地の悪いことだが、念のためにここで改めて書いて置けば、彼は戦時中、小林秀雄らと共に「近代批評」の旗手と称され、文芸批評や音楽批評に健筆を振るい、また、昭和17年10月には京都学派を中心とした反西洋的シンポジウム「近代の超克」に司会者として登場した人である。またこの時期、「日本文学報国会」の評論部門の幹事長、審査部長などの任に就いていたために、戦後、新日本文学会の小田切秀雄などから「戦犯」として糾弾されたこともあった。しかし、こうした来歴とそれ故の批判が62年に芸術院会員となり、72年文化功労者となる妨げとなることはなかったようだ。

渡辺京二の『作家の日記』論ともいべき『ドストエフスキーの政治思想』が、まとまった形で刊行されたのは2012年のことだが、文章そのものが書かれたのは昭和48年から49年（1973年から74年）——ということは、図らずも河上の文章と同じ年に書かれていたということを意味する。これは一体いかなる符合であろうか、何となく興味深く思われる。ちなみに書き添えておけば、河上の文章が発表されたのは「中央」の「文壇」の主力雑誌『文学界』であったのに対して、渡辺のそれが発表されたのは『暗河』という「地方」の小さな同人誌であった。こんな違いにも、早くも両論の隔たりを予感させるものがあるのである。

渡辺は『日記』、とりわけその「戦争論」（以下では表現の簡略を旨として、二つを合わせて適宜「戦争論」と称することにする）を「反動的政治論」として読むこと自体を拒否する。氏は「自分の書いたものが西欧では理解されないだろう」というドストエフスキー自身の「確信」ともいべき「予感」に得心しつつ（渡辺、14）、以下のように書いているのである。

近代市民社会的な合理主義によって辟易と黙殺の対象とならざるを得なかったところにこそ、すなわち、彼らの暗黙の知的前提と宿命的に敵対せざると得なかったところにこそ、ドストエフスキーの政治思想の今日的問題性が潜んでいる。（渡辺、16-17）

「今日の問題性」とは何か——その答えは次の一文にあるように見える。

ドストエフスキーの西欧派批判は理屈抜きの、本能のような嫌悪感に根拠を持つ。ドストエフスキーは市民社会を止揚する共同社会を西欧的な論理とは相容れぬ独特の視角か

ら構想する。(渡辺、70)

思うに、この二つの文章の中に、渡辺の「戦争論」の基調が示されている。それを約言すれば「反近代」「反西欧」というモチーフということだが、氏の「戦争論」を検討・紹介する上で大切なのは、このモチーフが一人ドストエフスキーだけのものではなく、実は渡辺自身のそれでもあるということである。ここで我々は渡辺自身の思想の来歴を想起しないわけには行かない。

私たちは氏のことを何よりも『逝きし世の面影』(1998年)の著者として知っている。これは近代化によって片隅に追いやられた江戸庶民の姿を、異邦人の目を通して再現して見せたもので、「古き良きもの」への愛惜の念に満ちた掛け値なしの名著だが、この著作の思想は『近代の呪い』(2013年)の中に凝縮されている。その内容はタイトルそのものが示しているから、この本について贅言を用いるまでもないと思われるが、つまるところ、氏の「戦争論」の根底にあるのは「前近代」への愛惜の念と表裏をなすこの「呪い」なのである。

この「呪い」の出所は、と問えば、それは氏の水俣体験に行き着くだろう。

1956年に「公式」に発見された水俣の「奇病」が公害病の認定を受けたのは、やっと12年後の1968年のことだが、そこに至るまでの過程で石牟礼道子の小説『苦海浄土』が大きな役割を果たしたことは、すでに周知のとおりである。そして、この間、渡辺が69年に「水俣を告発する会」を結成し、終始石牟礼に寄り添い、その執筆を支援し続けてきたこともまた、知る人の知るところである。氏のドストエフスキー論が書かれた1973年という年が、まさに水俣訴訟の最中であったことを、ここで改めて銘記しておきたいと思う。

氏の「水俣体験」は「近代への呪い」の他に、もう一つ、大きなものを氏に齎したように思われる。それは「民衆の発見」ということである。これはちょうどオムスクでの4年間の獄中体験が、ドストエフスキーにロシアの民衆(ナロード)を発見させたのと似ている。獄中の喧騒の中で、狼に襲われることを恐れるドストエフスキー少年の心を優しく包んでくれた「百姓マレイ」の思い出にふける作家に、氏は深い共感を寄せている。ドストエフスキーはこの回想を契機として、自分が民衆を全く別の目で見ることができるようになったことを直感するのだが、氏は「マレイ」に対する作家のこの想いを、『日記』全体にとっての「主調低音」と呼んでいる。

また、「百歳の老婆」という短編に氏は「民衆という存在に対するドストエフスキーの感受性の質」を読み取っている。それは民衆を「歴史から最も遠い存在、つまり、最も自然に近づいた人間の在り方」として捉え、その「無限の繰り返し」「見事な充足と自己完結性」の前におののく感性のことである。(渡辺、87)

この短編にドストエフスキーのこのような感受性を読み取りえた氏自身の感性は、おそらく、「知識人」として水俣の漁民たちに対峙してきた自らの在り方への反芻の結果として行き着いた、一つの境位だろう。私はそのことを次の文章に読み取る。

知識人は普遍性へ向かう認識の上昇運動の法則性において、そうすまいと思っても常に民衆との意識の位相的な断絶の端緒に立たされている。その断絶を埋める途はただ一つ、

知識人が民衆の存在構造を自分たちの思想の根底に包摂できるような論理を創り出すことである。(渡辺、40-41)

そして、氏はドストエフスキーの民衆観の中にこのような「論理」を認め、そのことを承認することを『日記』を読む前提と見なしているのである。

氏はこのような「論理」を創り出しえたドストエフスキーに、彼の批判者たる「西欧派の知識人」たちを対置している。氏によれば、彼らは「政治的領域における自己表現から最も遠い存在」であるはずの民衆を、「その自然的な過程から引っ張り出し・・・西欧市民社会における公民的過程、すなわち言語的表現の回路」に引きずり込もうとしているのである。しかし、ドストエフスキーは「沈黙の裡に生き死にする自然態としての大衆の願望は、決してそのような回路においては表現できない」と考える人であった、と渡辺は言う。

思うに、ドストエフスキーと「西欧派知識人」との関係は、渡辺と戦後の「進歩的知識人」の関係に読み替えることが出来るだろう。私たちはここでまたしても、氏の思索の来歴に思いを馳せることになる。

氏は15歳の年に大陸からの引揚者として、熊本で終戦の年を迎えた。戦時中にどんな考えを抱いて思春期を過ごしていたか、それを詮索するのは「伝記研究」の課題であり、本稿の能くするところではないが、少なくとも、戦前、戦中を通じて、声高に、あるいは小さな声でながら体制を翼賛していた知識人たち、あるいは、翼賛しないまでも沈黙のうちに無事に生き延びてきた知識人たちが、戦後に意匠も新たに「進歩的知識人」として旧い日本の非を打ち鳴らし、「近代化」のやり直しを声高に叫び始めたのを見て、青年期に入りつつあった少年が奇異と不信の念を抱いたとしても不思議ではないだろう。1948年に共産党に入党した氏がその6年後の29年には「新日本文学会」の熊本支部の再建に参加しているという事実も、この間の事情を幾分なりとも説明していると思われる。氏がドストエフスキーの「戦争論」の特徴として、西欧派的知識人へのドストエフスキーの嫌悪感・不信感を強調していることは上に述べた通りだが、この嫌悪感・不信感は日本の「進歩的知識人」への氏自身のそれらが下敷きになっているのである。氏はおそらく『文学界』に連載されていた河上の白々しいドストエフスキー論を読みながら、黒い胆汁のこみあげてくるのを抑えがたかったに違いない。

このように、渡辺の『日記』論、「戦争論」ではドストエフスキーの「反近代」「反西欧」のモチーフと「民衆」像と「西欧派的知識人」への嫌悪感が、氏自身の体験とない交ぜに織りなされているのだが、そうした議論を通じて、当の「戦争」へのドストエフスキーの対応はどの様に説明されることになるのだろうか。

氏は戦争においてドストエフスキーが関心を抱いていたのは具体的な戦争の過程ではなく、「民衆の運動」であったと言う。氏は「ドストエフスキーが批判者の近代的思考を向こうに回して民衆の熱狂を擁護したのは、《問題を民衆的精神において解決する》という基本的な立場においてであった」と書いている。(渡辺、105-106)

では、渡辺はこの「民衆の熱狂」の中にドストエフスキーが何を見たというのだろうか。それは「民衆の意識の深層に絶えず再生産されてやまない幻影」である(渡辺、100)。左翼の政治思想はこの幻影(幻想)の政治的欺瞞性と危険性を暴露し、この幻想の根拠を解消させる方向に進むのに対して、ドストエフスキーの場合、「民衆がその魂のうちに育て

きた幻影は、左翼思想が未だかつて想到もしなかった民衆的な真理への欲求を示すものだというふうに、民衆の幻自体を純化し聖化する方向に思考が展開する」(渡辺、99)のだと氏は言うのである。

では、「民衆の幻」の本質とは何か。氏に言わせれば、それは「市民社会に馴染めない」「民衆の原初的な共同性の夢」である。この戦争において、民衆はこのような夢に向かって駆け出したのである。そして、ドストエフスキーはその夢に自らの思想を寄り添わせたのである——これが氏の解釈するドストエフスキーについて批判される「戦争賛美」の内実なのである。

誠にエキサイティングな議論ではあるが、しかし、ここでいくつかの疑念が生ずることを禁じ得ない。それを箇条的に示せば以下の通りである。

- 1 ドストエフスキーの「正教徒」というファクターは氏の言うドストエフスキーの「民衆論」の中でどうカウントされるか。
- 2 「民衆(ナロード)」自体の実体に変化はないか——獄中で作家に「開眼」を齎した「ナロード」と歓呼の声を上げて出征兵士を送り出す70年代の「ナロード」とは、その内実において果たして同じ「ナロード」なのかどうか。社会環境の変化に応じた「ナロード」そのものの変貌を見るべきではないか。
- 3 ドストエフスキーのアジア進出論は「民衆の幻影」論で説明できるか。ロシアの大地がロシアの民のものであるならば、アジアの大地はそこに生きる民のものであることを、ドストエフスキーは想像できなかったのだろうか。

\* \* \*

以上、前世紀の初頭から今日に至るまでの、「露土戦争」についてのドストエフスキーの議論についての諸家の論評を通覧してきたが、意外と多様性に富んでいることに、我ながら驚いている。今後は、これらの議論を踏まえ、差し当たりは『日記』を手がかりとして、ドストエフスキーの「近代西欧」観を改めて確認し、それをゲルツェンのそれと比較するという、次の作業に向かいたいと思っているところである。

#### 文献

- ・カー、E-H. (松村達雄訳)『ドストエフスキー』筑摩叢書、1968年(原著1931年)
- ・グロスマン、レオニード(北垣信行訳)『ドストエフスキー』筑摩書房、1966年(原著1963年)
- ・ジイド、アンドレ(寺田透訳)『ドストエフスキー』岩波書店(文庫)、1955年(原著1908年、1921年)
- ・トロワイヤア、アンリ(村上空住子訳)『ドストエフスキー』、中公文庫、1988年(原著1960年)
- ・マウリーナ、ゼンタ(岡元藤則訳)『ドストエフスキー』紀伊国屋書店、1964年(原著1952年)
- ・マリ、ジョン・ミドルトン(山室静訳)『ドストエフスキー』泰流社、1977年(原著1916年)

年)

・モチュリスキー、コンスタンチン・(松下裕・恭子訳)『評伝ドストエフスキー』筑摩書房、2000年(原著1947年)

・河上徹太郎『わがドストエフスキー』河出書房新社、1977年

・渡辺京二『ドストエフスキーの政治思想』渡辺京二傑作選④、洋泉社、新書Y、2012年